各業務：院内感染対策室

―概要―

感染対策に関する院内の組織は、院内感染対策委員会（ICC）、院内感染対策チーム（ICT）、院内感染対策ワーキンググループ（WG）から成り立っている。2018年からは、薬剤に関する業務に関してICTから独立した抗菌薬適正使用支援チーム（AST）を発足した。院内感染対策室では、ICTとASTが協同し感染症から、患者やご家族・来院者、スタッフなど病院内のすべての人を守るために組織横断的に活動を行い、病院内の感染対策に努めている。感染症は、施設を超え地域全体に広がる可能性がある。近隣の医療機関とも連携しながら、地域ぐるみの感染対策を推進していく必要がある。当院は、泉州南部地域唯一の感染管理加算1取得施設であるため、感染管理加算の連携施設だけでなく、長期入院療養施設や介護に携わる職員などに向けても指導を行い泉州南部地域の感染対策の向上に努めている。

―実績―

2019年度　院内感染対策室の活動と担当者

グループ	細　目	担当者
サーベイランス	BSI、SSI、VAE 針刺し、粘膜汚染	リンクナース 松浦　山内
環境ラウンド	感染の視点から各病棟の環境を調査	リンクナース ICT メンバー
医療材料	新規医療材料の検討	倭　深川　山内
教育	職員に対する教育活動 ・院内感染対策研修会 ・e-ラーニング研修 ・手洗い検査 ・手指消毒剤使用量調査 ・手指衛生直接観察 ・オーデットの実施 （末梢カテーテル、CV カテーテル、尿道カテーテル、個人防護具について）	リンクナース ICTメンバー
清掃関係	針落下の状況調査、清掃ミーティング、清掃ラウンド	リンクナース 山内
広報	The 院内感染対策 News　発行	山内　泉原
耐性菌、抗菌薬（AST ラウンド）	抗生剤適正使用チェック 医師への指導 サーベイランス 感染症レポート作成	ASTメンバー

◆サーベイランス

【針刺し・粘膜汚染　件数】

	針刺し	粘膜汚染	合計
2019年度	35	16	51

【BSIサーベイランス】

期間	延べ入院患者数	延べ挿入日数	使用比	感染率
2019年4月～2020年3月	10,477	440	0.04	2.27

◆広報

The院内感染対策News（№1～№4）発行

◆教育

クロストリディオイデス・ディフィシル感染症(CDI)について　出席率:89%				
6/19	7/8	7/10	7/12	7/16
7/17	7/18			

結核の基礎知識　出席率:91%				
12/18	12/25	12/26	1/14	1/17
1/20				

◆感染管理加算

【相互査察】

監査施設・査察病院	実施日
査察施設：大阪母子医療センター	9/19
監査病院：府中病院	3/17

【合同カンファレンス】

テーマ	開催日	担当病院
小児流行性ウイルスについて	6月19日	泉大津市立病院
クロストリディオイデス・ディフィシル感染症（CDI）の治療事例について	9月26日	当院
結核について	11月20日	和泉市立総合医療センター
多剤耐性菌（MDRP、VRE、CREなど）の対応について	3月5日	当院

◆結核関係

1）結核患者治療成績評価検討会（第1,2,3四半期）
　管内の塗抹陽性結核患者の治療成績の検討及び助言
　6月10日（月）、9月9日（月）、12月9日（月）
　14時30分～17時
　場所：大阪府泉佐野保健所　3階
　倭　正也

◆感染症関係

1）2020年1月10日（金）
　令和元年度第1回阪神地区感染症懇話会講演会
　「G20大阪サミットにおける感染症強化サーベイランス活動」
　大阪健康安全基盤研究所　柿本健作氏講演
　「東京2020大会や大阪・関西万博などマスギャザリングに備えた感染症対策について」
　国立保健医療科学院　齋藤智也氏講演
　「クリミア・コンゴ出血熱（CCHF）の臨床とトルコにおける感染症対策」
　大阪市立総合医療センター　天羽清子氏講演
　場所：大阪府病院年金会館　コンベンションルーム
　倭　正也

◆HIV関係

1）2019年11月15日（金）
　令和元年度大阪府感染症対策審議会　エイズ対策及び医療連携推進部会　エイズ医療委員会
　場所：大阪赤十字会館4階401会議室
　倭　正也

2）2019年12月12日（木）
　令和元年度近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議
　場所：国立病院機構大阪医療センター　緊急災害医療棟3階　講堂
　倭　正也

―今年度の成果と反省点―

地域ぐるみの感染対策を推進していくには加算に関わりなく、地域全体の包括的な医療機関によるネットワークの構築が必要である。その為には行政・保健所との連携が必須である。地域における感染予防・管理等に一体的に取り組むため、ICTメンバーと許可を事前に得た施設のみ泉佐野保健所職員と共に当院と連携している感染管理加算2施設に出向き環境ラウンドを実施した。実際の現場を確認しなが

ら感染対策についての指導や相談対応などを行った。また、加算2施設から依頼があり関連施設の介護老人保健施設に感染対策についての講習会を実施した。泉佐野保健所主催の泉佐野保健所管轄内の医療施設対象の感染症対策連絡会や保育施設対象の研修会にアドバイザーとして参加し感染対策の指導を行った。当院主催の合同カンファレンスは、自施設の症例を元にカンファレンスを行った。今年度は、クロストリディオイデス・ディフィシル感染症（CDI）、多剤耐性菌（MDRP、VRE、CREなど）の症例を通して適切に感染対策がなされているか、抗菌薬が使用されているかの確認を行った。昨年度から引き続き、病棟でサージカルマスクが正しく着用できているかの確認を行ったが、息苦しい事を理由にマスクから鼻が出ている職員が多数認められた。昨年度に作成した、フェーズ別インフルエンザ感染予防対策を元に対策を実施し職員、患者間の感染は認められなかった。感染対策における最も基本的な要件として、医療従事者による手洗いの励行がある。WGのメンバーに手指衛生直接観察を行ってもらった。しかし、WHOが推奨しているアルコール使用量は「1患者当たり1日20ml」であるが、20mlに達していたのは、昨年度は中央部門のみであったが今年度は一般病棟でも一部の部署で目標を達成する事ができた。1患者あたりの手指衛生の回数について、目標回数を20と定めたが、中央部門は目標回数を達成していたが、一般病棟は一部の部署で目標を達成する事ができた。昨年度に引き続き行った手指衛生直接観察の結果も、患者接触前43％（昨年度31％）、患者接触後54％（昨年度32％）と前年度と比べて遵守率は向上していた。リンクナースの働きもあり手指消毒剤の使用量、遵守率ともに向上が認められた。2019年1月にバンコマイシン耐性腸球菌（VRE）保菌者が発生したが、看護局の協力のもと職員、患者の手指衛生による感染予防策や病棟の環境整備を徹底するなど、マニュアルに基づいたVREの伝播防止対策を実施し終息に至る事ができた。リンクナースに対しては、昨年度より年間教育プログラムの1つとして“各部署における活動計画の立案と実施”を加えた。その中で、リンクナースは自部署での活動テーマを自ら選び、他部署のリンクナースとその内容を共有しながら活動に取り組んでもらった。薬剤科では、科内の環境整備を行うにあたり、定時でのクリーンタイムの実施がほぼ定着した。より環境整備の質を上げていけるよう積極的にICTメンバーによる指導を行った。全スタッフが継続して環境整備を行うよう引き続き指導を行っていきたい。細菌検査室では、昨年にひきつづき、入院患者のVRE検査を培養法とPCR法で実施し、早期検出に努めた。また今年度、新たに結核菌、CD、血液培養陽性時のMRSA検査にPCR法を導入し、より迅速な結果報告が可能となり、臨床に寄与できたと考える。リハビリテーション科では、毎朝リハビリテーション室の清掃を行った。方法としてウェットクロスを用いている。今年度より各セラピストの手指消毒剤の使用量の管理を行った。1月当たりの使用量を算出し使用量の少ないセラピストに対し直接的な指導を行っていくことで感染への意識付けを図ることが出来たと考える。昨年度と同様に毎朝のリハビリ室の清掃を継続しリハビリ室の環境の維持に努めた。また体調不良時の報告を徹底させていく様に指導を行っている。今年度の反省として1患者当たりの手指消毒剤の使用量が少ない事が挙げられる(1患者当たり2回程度)。放射線技術科では、感染に対する基本的な知識の習得に重点を置いた。その方策として、院内の感染対策研修会への全員参加を最低限の目標とした。結果、業務的に厳しい面もあり当日参加ではなくDVD研修を含めて全員参加は達成された。個々の認識にとって有意義になったと考える。

―来年度への抱負―

感染対策の基本は手指衛生であるが手指衛生の回数とタイミングが大きく向上した部署も認められたが昨年度と同向上が認められない部署も存在した。来年度は、WGのメンバーに臨床工学科とリハビリテーション科を追加し病院全体で感染対策の意識向上に向けて教育や現場で積極的に介入を行っていく。薬剤科では、ICTメンバーによる薬剤科スタッフへの積極的な啓発活動を引き続き実施し、環境整備の質を上げることを目標とする。AST活動として、AMRアクションプランに基づき内服第3セフェム系抗菌薬の使用状況の把握をし、外来患者の急性気道感染症、急性下痢症の抗菌薬使用状況の把握を新たに行うこととする。細菌検査室では、CRE（カルバペネム耐性腸内細菌科細菌）の検出が、昨年度の2件から7件へ増加した。院内感染対策では早期の多剤耐性菌への適切な対応が重要であるため、検査部門においてもより一層、貢献できるよう努めたいと考えている。リハビリテーション科では、来年度は院内のWGにセラピスト1名を介入させ感染の事例に対し他部門との情報の共有を行っていきたいと考える。また手指消毒剤の使用量を増加させていくことで感染の防止に努めていきたいと考える。放射線技術科では、基礎知識に基づき個人が積極的な感染対策行動を提案できる風土を醸成する事が必要である。それには引き続き基礎教育が必要である。